ヒマラヤ学誌　*No.18, 58-64, 2017*

雲南と馬

平田　聡

京都大学野生動物研究センター

中国雲南省の梅里雪山とその周辺地域を訪問した。登山口となった西当村から、到着地である氷河湖下のベースキャンプまで、片道約 16 キロの道程の大半を現地のウマに乗って移動した。同行したメンバー全員が複数のウマに分乗するにあたって、ウマの割り当てをくじびきで決める方法が採用された。これは、ウマの割り当てに人間の意思が入ることでトラブルになることを避けるための、現地流のリスク・マネージメントの方策と解釈できる。茶馬古道に示されるように、ウマとヒトは雲南省および梅里雪山周辺では歴史的に深い関わりがあり、ウマが現地の文化の重要な部分をなしている。今回の訪問における長時間の乗馬体験によって、温厚なウマを選択してきたウマの家畜化に関するヒトとウマの関係の歴史が明瞭に理解できた。こうした家畜化は、社会的知性の進化ともかかわりが深い現象と考えることができる。

中国雲南省・梅里雪山へ

2016 年 9 月 20 日から 9 月 26 日まで、中国雲南省を旅した。私が指導している中国人留学生のリウ・ジエ氏の現地での様子を視察することが主な目的である。リウ・ジエ氏は、京都大学野生動物研究センターの博士後期課程 1 年生で、博士号のための研究として、本人の地元の中国雲南省で雲南キンシコウの調査をおこなっている。今回は、私より先に中国に入っていた松沢哲郎・京都大学高等研究院特別教授と、京都大学 1 年生で山岳部の井ノ上彩音さんに合流しての旅となった。また、全体を通して、リウ・ジエ氏およびその父君のリウ・ニン・中国南西林業大学教授にアレンジをしていただいた。リウ・ジエ氏の主な調査地は雲南省の老君山（ラオジュンシャン）であるが、今回はそこではなく、別の地の梅里雪山（メイリーシュエシャン）を目指した。以下が旅程である。

1 日目（9 月 20 日）：朝 9 時関西空港発の便で、広州、昆明での乗り継ぎを経て 22 時過ぎに麗江（リージャン）空港着。23 時過ぎ麗江のホテル着。

2 日目（9 月 21 日）：麗江を朝 7:15 に出て車で移動。途中、香格里拉（シャングリラ）を経て梅里雪山の麓の明永（ミンヨン）村へ。17:30 明永着、ホテル泊。

3 日目（9 月 22 日）：朝 7:40 に明永を出て車で移動。8:40 に西当（シーダン）村の登山口に到着。標高 2600m 強。9:30、ウマに乗って移動開始。標高の最も高いところで 3729m の峠を越えて、14:00 に雨崩（ユイボン）村到着。標高 3200m 強。ここでウマを乗り換えて、別のウマに乗って 14:45 に移動再開。急な昇り降りはウマを降りて徒歩で進み、17 時にベースキャンプ（大本営）に到着（写真 1）。そこからさらに乗馬および徒歩で進み、18 時に氷河湖に到着（写真 2）。標高 4000m 程度。19 時にベースキャンプに戻って泊。

4 日目（9 月 23 日）：往路と逆の行程で戻る。11:30 ベースキャンプ発、乗馬および急峻な斜面は徒歩で進み、14 時に雨崩を乗り換えて、17:30 に西当着。そこから車で移動し、19 時に飛来寺（フェイライシ）着。晴天であれば梅里雪山の最高峰カワカブが望めるところであったが、荒天のため見えなかった。ホテル泊。

5 日目（9 月 24 日）：朝 9 時に飛来寺を出て車で移動、18:45 麗江着、ホテル泊。

6 日目（9 月 25 日）：午前中に麗江の The Nature Conservancy で研究打ち合わせをおこなったのち、15 時麗江発の飛行機に乗って、16 時昆明着。昆明泊。

7 日目（9 月 26 日）：朝 10:40 昆明発の飛行機に乗り、長沙でトランジットを経て、18:15 関西空港着。

ウマでの移動

上記の旅程からも分かる通り、多くがウマに乗っての移動だった。3日目（9月22日）の9時半から19時まで、および4日目（9月23日）の11時半から17時半まで、途中何度かの休憩をはさみながら、長時間ウマに乗っていた。片道16キロ程度の道のりのほとんどがウマに乗っての移動である。

私は、子どものころにどこかの触れあい動物園か何かで数分間ウマに乗った記憶があるが、それ以外に乗馬の経験はなかった。今回が初体験である。何も困ることはなく、すんなり乗れて、快適な旅だった。9月22日に2頭、9月23日に2頭、合計4頭にそれぞれ数時間ずつ乗っていたわけであるが、どれもおとなしく、ただ背に跨っていればよいだけだった。同行した松沢教授、井ノ上氏、リウ・ジエ氏、リウ・ニン氏の4名もそれぞれ別々のウマに乗り、さらには我々の荷物を載せたウマも別に3頭いて、全体で隊列を組んでの移動であった。ウマは現地のオーナーがいて、そのオーナーも徒歩で並んで進み、全体の動きをコントロールする。ウマたちのおとなしさ、従順さに感心したのが乗馬初体験の感想である（写真3）。

くじ引き

ウマに乗るにあたって、興味深い方法が採用されていた。誰がどのウマに乗るのか、くじ引きで決めるのである。我々一行は、人間が5人いてそれぞれ別の合計5頭、さらに荷物用に3頭、あわせて8頭のウマに乗った。そのウマすべてがひとりのオーナーではなく、複数のオーナーのウマを寄せ集めた混成隊となった。誰がどのウマに乗るのかをくじ引きで決める、というのが現地のルールだった。

白い紙切れをちぎった切れ端に番号が書いてあり、その紙切れが折りたたまれて、書かれた番号が見えないようになっている。その紙切れが人数分用意してある。我々はそれぞれ、その紙切れをひとつ選ぶ。紙切れを開くと番号が書いてある。その番号がウマの番号に相当し、そうして割り当てられたウマに乗ることになる（写真4）。

ところがこのルールに従うと、困ったことが起こった。最初に西当の登山口からウマに乗ったとき、我々5人が2つのグループに分かれることになった。くじ引きの結果、松沢教授、リウ・ジエ氏、リウ・ニン氏、私の4人が同じオーナーのウマたちに当たって1つのグループを構成し、残った井ノ上氏が別のオーナーの隊に分かれることになった。みんなで揃って進むのかと思ったが、オーナーによって少し進み方が異なり、井ノ上氏の乗ったウマは、しばらくして、はるか後ろになり見えなくなった。

井ノ上氏は、大学1年生の女性であり、我々の中で圧倒的に一番若い。彼女が取り残されて見えなくなっては困る。リウ・ジエ氏を介して、我々のウマのオーナーに、彼女を待つように依頼したが、我々のウマのオーナーは憤慨した。さらに、ウマの割り当てを変えて、松沢教授、井ノ上氏、それから私の3人が同じオーナーの隊列になるように、これまたリウ・ジエ氏を介して依頼したが、オーナーはさらに憤慨して、なかなか聞き入れてくれなかった。

くじ引きに従う。これが現地の厳格なルールのようだった。最終的には、リウ・ジエ氏とリウ・ニン氏の説得と議論によってオーナーも妥協して我々の要望を聞き入れ、ウマの割り当てを変えてくれたが、基本的には誰がどの馬に乗るかはくじに従うべきのようだった。

くじに従うべき理由は、オーナーに直接聞けたわけではないので定かではないが、ウマの選択にヒトの意向が入るのを防ぐためではないかと思われる。ウマに乗るのは、一見すると簡単で、かつ我々は今回の旅で一度も事故にならなかったので実際に簡単で安全と思われたが、場合によっては危険なこともあるのだろう。山の斜面を進むので、ウマもろとも乗った人が転げ落ちるということも想像できる。

事故になった場合、ウマの選択に人間の意向が入っていたとしたら、その選択をした人間の責任が問われることになる。それに対して、くじ引きに従っていれば、事故に遭っても「運が悪かった」と納得できることになる。抽選結果に厳格に従おうとするのは、事故に遭った場合にその責任を「運」もしくは神のおぼしめしに帰属させ、人間の側の責任とトラブルを回避する、現地のリスク・マネージメントの方策なのだろうと思った。

写真１　梅里雪山の氷河のふもとの雨崩ベースキャンプ

写真４　ウマの割り当てを決めるくじ引き

写真２　氷河湖にて。同行した４名。

写真５　休憩小屋での風景

写真３　ウマでの移動風景

写真６　標高 4292m を示す碑

チベットと茶馬古道

今回の旅の地となった明永～西当～雨崩は、チベット民族が暮らす地域であり、チベット文化を端々で体験することとなった。ウマで移動している途中に、何度か山小屋で休憩してウマも休ませるわけであるが、そこでチベット茶やチベットの食べ物がふるまわれた（写真5）。

私はそもそも中国に来たのは過去に1回北京での学会に出席した際のみであり、それ以外の場所はチベットも含めて今回が初めてであった。チベット茶は、名前こそ聞いたことはあったが、飲んだことはなかった。ただ、それがヤクの乳を入れて作られていると聞き、今回はあまり飲まないことにした。乳糖不耐症で、牛乳を飲むとてきめんにお腹の調子が悪くなるためである。ただ、これは帰国後に調べて分かったことであるが、チベット茶に入っているヤクの乳は発酵させてあるため、実際には乳糖不耐症は影響ないようだ。次にこの地を訪れることがあれば、チベット茶を飲むことにしよう。

中国雲南省とチベットとは、はるか昔から交易があった。雲南省や四川省から、チベットのラサに続く交易路は、「茶馬古道」と呼ばれる。千年以上前から、雲南が原産である茶葉と、チベットのウマを取り引きするために使われてきた道である。茶と馬を交換するので文字通り茶馬古道と名付けられた。全長2000キロを超える道のりで、雲南省や四川省に始まり、揚子江やメコン川を渡って、梅里雪山を抜け、チベット高原に入る。途中で標高5000mの峠を何度も超える過酷な道だそうである。チベットは気温が低すぎて茶葉が育たない。チベット茶を作るには茶葉が必要であり、それを雲南省や四川省から取り寄せる。中国としては、チベットのウマが欲しい。茶葉60キロがウマ1頭の価値があったそうだ。

茶馬古道は、20世紀中盤ころから使われなくなり、いまは廃れてほとんど跡形もなくなっているそうである。近代化に伴って、舗装された道路が走り、運搬の手段は車にとって代わられた。ただ、今回ウマで移動して、ウマの有用性を実感するとともに、ウマが現地の文化にとってまだ欠かせない存在であることを見て取ることができた。車が入れない細い山道も、ウマなら通れる。ウマは、きわめて従順に、上に載せたヒトや荷物を運ぶ。日本ではこうしたウマ文化はもうほとんど残されていない。雲南省、梅里雪山の地域を旅して、人類が世界各地で古くから家畜化したウマと共に歩んできたことを体感することになった。

類人猿研究者から見たウマ

私はこの20年来、主にチンパンジーの研究をしてきた。社会的知性を中心とした、行動や認知の研究である。そうしてチンパンジーと関わってきた目から見て、ウマはとても違った生き物であることにあらためて気づかされた。何より、従順である。

チンパンジーは、概して攻撃性が高い。野生チンパンジーで子殺しとカニバリズムがあり、別の集団のチンパンジーとはきわめて敵対的な関係で、場合によっては隣接集団同士で殺し合いになることがある。また、同じ集団の中でも、特に男性同士の順位争いによって、致命的な攻撃的交渉がおこることもある。

私は主に日本国内の研究所で飼育されているチンパンジーを対象に研究をおこなってきたが、なにより大切なのは対象のチンパンジーと良好な関係を築くことである。チンパンジーは、相手が同種のチンパンジーであれ、人間であれ、初めて出会った時には大概攻撃的である。私の場合、とにかく長い時間をかけて顔見知りになり、時には夜に一緒の部屋で寝たりして、チンパンジーたちと関係を築いてきた。

そうして時間をかけて関係を築いたチンパンジーの、背中に乗ったことがある。文字通り、私が馬乗りになって、チンパンジーに進んでもらった。座りが悪くて乗り心地はよくないが、乗せてもらうことは可能であった。ただしこれは、長い時間をかけて信頼関係を築いてきたからこそ可能なことである。見知らぬ人がいきなりチンパンジーに乗ろうとしても、無理だ。チンパンジーの側がまずは敵対的な態度をとるので、初めて会う人は、チンパンジーに触ることすらできないだろう。また、あるチンパンジーが私を乗せてくれるようになったといっても、その同じチンパンジーが別の人を乗せるのを許すわけではない。別の人が来たら、またゼロから関係づくりをしなければならない。

雲南で乗ったウマたちは、こうしたチンパン

ジーたちの態度とまるで違っていた。私が近づいてもまったく敵対的な様子はなく、また警戒する様子もなく、おとなしく私を乗せてくれた。初めて見る人間でも誰でも、きわめて従順にしている。

また、ウマ同士の関係も穏やかだった。我々の移動では、異なるオーナーに属する別々のウマが同じ隊列を編成することになったが、違うオーナーのウマたちが隣同士になっても、ケンカをすることなく、互いを受け入れていた。チンパンジーであればこんなことは起こらない。違うグループに属するチンパンジー同士が出会ったら、特に男性同士の場合はその瞬間に敵対的、攻撃的になる。ペット化されたイヌでも、散歩中に見知らぬイヌ同士で出会って興奮して吠えあう、ということがあるだろう。ウマではこうしたことがない。ただ、相手が見えていないわけでもないし、相手がだれか区別できていないわけでもない。ヒトの手を離れて野生化したウマは、定まった集団を形成する。互いに相手を見分けて、きちんと集団を作るのである。

見知らぬ相手に寛容である、そうしたことが、人間がウマを家畜にするにあたって極めて重要だったと考えられる。ウマ同士で出会ってケンカが始まっては、たくさんのウマで隊列を組んで荷物を運搬するのにまったく向いていない。また、戦争で騎馬戦をするのにも、人間の戦争以前にウマ同士で戦いが始まっては元も子もない。ウマが元来温厚な性格だということにもよるのだろう。それが、人間による家畜化の過程で、一層の拍車をかけられた。

家畜化

ヒトがウマを家畜化したのはいまから5000年ほど前だと推定されている。最初は食肉用として、やがてソリや馬車を引かせる駆動用として、そして乗馬用へと様々な用途に用いられるようになった。最初に乗馬が始まったのがいつだか定かではないが、紀元前1000年以降、ユーラシア中央部のスキタイ（現ウクライナ地方を中心とした遊牧国家）や匈奴（モンゴル高原を中心とした遊牧国家）で騎乗した民族が草原を駆け巡っていた[1,2]。

家畜化シンドロームという言葉がある[3]。ヒトが家畜化してきた様々な動物で、似たような行動特徴や外見上の特徴がみられる現象である。ヒトが家畜化した動物たちには、ウマのほかに、イヌ、ネコ、ウシ、ブタ、ヒツジ、ヤギ、マウス、ラットなどがある。こうした家畜種たちの間で、野生種と比べて次のような特徴を持つものが多い。脱色（体の一部の白色化）、垂れた耳、脳の小型化、歯の小型化、行動の幼形化といった現象である。

さらに、知性との関係で注目されているのが、家畜化と社会的認知の促進の関係である。例えば、イヌはヒトの指示をよく聞く。お座り、待て、伏せなど飼い主の出した指示によく従うし、ヒトの指さしなどジェスチャーをよく理解する。つまり、ヒトの発するコミュニケーションのシグナルの理解力が高い。これは、社会的認知能力が高い、と言い換えることができる。

普通には、イヌの社会的認知の高さは、ヒトが選択してきた結果であると考えられがちである。ヒトの指示をよく聞くイヌの個体をヒトが選んできたために、そうした特徴が促進されてきたと考えるわけである。ただ、シベリアのあるキツネの群れの研究結果から、別の解釈が持ち出された[4]。このシベリアの地では、野生のキツネをヒトが代々飼いならす試みがおこなわれてきた。キツネを2群に分けて飼育をおこない、そのうち1群は、ヒトを恐れない、ひとなつこい特徴のキツネを選んで繁殖させた。もう1群は、特に基準なくキツネに任せて繁殖させた。その結果、ヒトを恐れないキツネを選んで繁殖させた集団では、全体的に社会的認知の能力が高いことが分かった。

家畜化の過程で、ヒトを恐れない性格を持つ個体を選んでいくと、その副産物として、社会的認知能力が促進されてくる可能性がある。家畜化されたウマたちも、ヒトのシグナルをよく理解する必要がある。歩く、走る、止まるといった行動を、人間の指示に応じて行う必要がある。こうした特徴を含めたウマの行動的・認知的特徴が、ヒトを恐れないウマを洗濯した副産物として生じてきた可能性がある、というのが家畜化シンドロームに基づいて提示された仮説から演繹できることである。ヒトを恐れないこと、ウマ同士で寛容な関係を築けること、そしてヒトの指示をよく聞くこと、といったそれぞれ特性が、別々にヒトが選んで繁殖させてきた結果ではなく、単一の「ヒトを恐れない、おとなしい」という特徴を選択した結果として生じてきたのかもしれない。

今回の私の旅で、ヒマラヤ山脈の東に位置する梅里雪山に初めて赴いた。私自身登山はこれまでほぼ経験がなく、国内で富士山に登ったこともない。今回訪れた、標高 4000m 前後の地域は、私の人生の中で行った最高地点となる（写真 6）。そして、これも人生初の、乗馬での長距離移動を経験した。そのなかで、高地にまで至る人類の適応放散、その中でのウマとヒトの関係、さらに知性の進化についてあらためて実感しながら考える旅となった。

引用文献

1） Chamberlin EJ: Horse-How the horse has shaped civilizations. Bluebridge, New York, USA, 2006.

2） Goodwin D: The importance of ethology in understanding the behaviour of the horse. *Equine Vet. J*. 28: 15-19, 1999.

3） Wilkins AS, Wrangham RW, Fitch TW: The “domestication syndrome” in mammals: a unified explanation based on neural crest cell behavior and genetics. *Genetics* 197: 795-808, 2014.

4） Hare B, Plyusnina I, Ignacio, N, et al.: Social cognitive evolution in captive foxes is a correlated by-product of experimental domestication. *Curr. Biol*. 15: 226-230, 2005.

Summary

Yunnan and Horses

Satoshi Hirata

Wildlife Research Center, Kyoto University

I visited Yunnan, China for the first time in my life. The area I visited was Meili Xueshan. The travel was mostly done by riding horses, with the help of local people. A unique feature of our visitors' riding horses was that we had to draw lottery to decide a horse that we will ride on. It appears that this system is to prevent human decision to take place in horse selection but to leave it to chance as a risk management strategy. The area I visited can be characterized by Tibetan culture, and the road called "tea road" extends from Yunnan, China to Tibet for exchanges of tea leaves in Yunnan and horses in Tibet. The humans and horses have long history in this area, as well as many other places in the world. Due to domestication, the most conspicuous feature of these horses are their tameness. There is a phenomenon called domestication syndrome, and close look at domestication would lead to a hypothesis that tameness caused by domestication and facilitation of social intelligence are closely tied with each other. The horse riding experience in Yunnan make clear that this hypothesis may at work in domestication of horses.